



報道で紹介された美瑛高校 18

◆令和6年8月30日(R6. 9. 7びえい新聞)

探究学習「MA+CHプロジェクト」の一環として「美進」さんで農業体験を行いました。様々な人が関わって産業が成り立っています。美瑛町にはたくさんの魅力と学ぶ場があります。最大限活用し自らを成長させていきましょう。

(3) 2024年(令和6年)9月7日

ひえい新聞

美瑛高校の生徒たちと一緒に龍谷大学の学生たちも活動。美瑛高校では8月30日、農業担い手研修センター「美進」で1学年の総合的な探究の時間を使った農産物の収穫体験を行った。美瑛町の就農支援や農福連携について学ぶことを目的としたもので、この日は龍谷大学の学生たちも一緒に活動。まず「美進」の研修室で、美瑛町で取り組まれている農福連携についての説明を受けた。続いて圃場へ移動。美瑛高校の生徒たちはビニールハウスでトマトの収穫、龍谷大学の学生たちは圃場でジャガイモの収穫を体験した。収穫

1学年の総合的な学習の時間で農福連携を学習
美瑛高校の生徒たちが「美進」で収穫体験



体験では、農福連携のジヨブコーチを務める岸本雅宏氏が作業手順などを説明。トマトの収穫には「色や大きさが分かるようカートに見本となるトマトを付けている」との障がい者への必要な配慮も添えた。生徒たちはトマトの色や大きさを確認しながら手際よく収穫。1時間ほど作業を行った後に、龍谷大学の学生たちと一緒に実習生が育てたスイカを試食。大学生と交流した。

収穫したトマトは「数日したら赤くなり食べごろになる」との説明を受け、それぞれお土産に。学校に戻り校長室へおすそ分けする生徒もあり、三上英一校長も笑顔で受け取った。

一方で町による農福連携



の実践圃場となっているものの、この日は実習生の姿はななく単なる収穫体験となっていたのは残念なこと。農福連携推進協議会の中でも事業への福祉行政の関わりが課題とされており、障がい者の就労についての議論を深めると共に、体験を受け入れる際は農業と福祉のそれぞれの立場から問題も含め事業内容を説明、交流も含め農福連携を一緒に考えてもらえるような「学びのある体験」への工夫を願いたい。